

カルティニの著作と追悼記事について

——一九世紀末ジャワとオランダにおいて

カルティニはどのように認識されていたのか——

I はじめに

カルティニ (Raden Adjen Kartini, 1879-1904) は、インドネシアにおける女性運動の先駆者としてよく知られている。彼女の思想とその生涯は、書簡集 *Door Dustersius tot Licht* 『闇を越えて光へ』のうちに示されている。しかし、カルティニは生前、書簡集に収められたもの以外にも多くの文章を記し、それらは当時、オランダの雑誌に掲載されていた。

本稿では、カルティニがオランダ語で発表した著作とカルティニの追悼記事を紹介し、カルティニの生きた姿を浮かび上げさせる。これに先立って、まずカルティニという人の概略を示してお

こう。

富永泰代

カルティニはジャワ貴族の家庭に生まれ、中ジャワ北岸のジュバラ (Jepara) のヨーロッパ人小学校 (Europese Lager School) で学んだ。ここでは、東インド在住のオランダ人の子女を対象に、オランダ教師によって本国とほぼ同じ教育が行なわれていた。ジャワ人であるカルティニがその学校へ入学できた背景には、十九世紀後半の植民地社会の変容がある。当時、オランダ領東インドでは、本国における産業革命の進展にともなって、実業家や私企業による投資が活発になり、ジャワでは、運輸・通信の発達がみられた。それとともに、植民地の行政機構が拡大し、オランダから赴任する官吏を増員しただけでは足りず、下級官吏が植民地

の住民から調達されることになった。そのためには、植民地の住民にもオランダ語教育を与える必要があり、一八六四年にヨーロッパ人小学校がジャワの住民に公式に開放された。また、同年に下級官吏試験（Kleinambtenars-examens）の実施が決定し、それにはヨーロッパ人小学校修了が条件とされた。これを機にヨーロッパ人や原住民上層部の子女に官吏登用の道が広がった[Kroeskamp 1974: 469]。これによって、ジャワの貴族や都市の上層社会では、オランダ語とジャワ語のバイリンガルの生活空間が形成されはじめた。カルティニは、このような状況の下で、オランダ語教育を受けた初期のジャワ人である。その兄達はHBS (Hooger Burger School) へ進学し、さらにオランダの大学へ留学した者もいた。

しかし、カルティニは十二歳の時、父親に強制的に退学させられた。当時のジャワには閉居の慣習があり、それに従わなければならなかったからである。一般に、閉居はジャワ語でピンギタン (Panggih) と呼ばれ、年ごろに達したジャワ貴族の娘に結婚まで外出を禁じる慣習であった。彼女は、兄達と同じようにHBSへの進学を希望していたにもかかわらず、閉居によって行動の自由を失なった。しかし、彼女はこのような状況を断じて納得できなかった。一度ヨーロッパ人小学校に学んだカルティニは、自己の

考えがたとえジャワの伝統的価値観に反するとしても、その枠組の外では容認されることを感じとっていたからである。しかし、彼女は自身の置かれた状況を、閉居当初は単に個人的なレベルでかき捉えることができなかった。

世間との交流が断絶状態にあるなかで、オランダ語の書物が、カルティニと外の世界をつなぐ唯一の手段であった。彼女は其中で、当時のヨーロッパにおける女性の地位向上という考えを知った。その考えを通じて、彼女は自身の体験を直視し、ジャワの女性の実状を客観的に認識できるようになった。同時に、彼女は自身の価値に気づき、女性としてジャワ人として自尊の念をもつようになった。その結果、彼女は新しい知識をもとに構築した考えを書簡に記したり、出版物に発表しはじめた。また、彼女はジャワ人女性の地位向上のために教育の必要性を説き、自ら女子校を開設した。

ここで重要なことは、カルティニが閉居中に、オランダ語の書物から新しい知識を学び、思索を深めたことである。その詳しい経緯や彼女のオランダ語の読書内容、およびジャワでの西洋の書籍の入手状況に関しては、すでに「カルティニの『世界認識』の形成過程」で述べたため、ここでは詳述しない。しかし、彼女がオランダ語の出版物で、十九世紀末のヨーロッパにおける女性解

放思想を知ったこと、それを通じてジャワの実状を客観的に認識しえたこと、さらに十九世紀末のジャワで、オランダで発行された書籍をほぼ時を同じくして読むことが可能であったこと、以上の三点を再度ここで強調したい。

さて、従来のカルティニに関する研究では、二〇世紀初頭における「倫理政策 (Ethische-politiek)」、特にその政策の骨子のひとつであるオランダ語教育の普及という観点から、カルティニが考察されてきた。また、カルティニはインドネシア現代史と民族主義運動の研究において、インドネシア民族主義運動の先駆者として捉えられてきた。

しかし、実際にカルティニが生きた時代は、主として十九世紀末である。それは、インドネシア民族主義が始まる約十年前の時代であり、しかも女性性はジャワの伝統的価値観によって、社会的に束縛された時代であった。

また、研究に用いられる史料に関しては、その生涯や思想を考察する上で、先述の書簡集が常に用いられてきた。それは、彼女が西洋人の文通相手に宛てた手紙を、一九一一年に書簡集として出版したものである。この本からの収益は「カルティニ学校」設立資金とされ、一九一三年に「カルティニ基金」委員会が発足し、同年九月にジャワで「カルティニ学校」が開校した。この一連の

事業を推進した主要人物は、アベンダノン (J.H. Abendanon)^②であった。彼は書簡集の編集も行ない、その中でカルティニは、オランダ語教育を受け、ジャワ人女性の地位向上に献身的な若き女性像の好例〔富永・1992: 95〕として捉えられている。また、この書簡集は、編集時の文面の省略や、採用されなかった手紙が多数あったこと〔Kartini 1987: XIII〕が指摘されている。それにもかかわらず、この書簡集が唯一の史料の如く引用され続けてきた。一方、カルティニのほかの著作が用いられることはほとんどなかった^③。

先述のように、本稿では、カルティニが生前に公表した著作とその掲載誌、および追悼記事を紹介する。前者では、生前のカルティニの見解を考察する。そして、後者では、彼女の死亡直後のオランダとジャワの双方で、カルティニがどのように認識されていたのかについて、理解できると考えるからである。そして、これらのうちに、カルティニの実像を解明する手が見出せるであろうと考えるからである。

① 一九六四年にカルティニは「インドネシア国家独立英雄」に加えられた。

② 一九〇〇年から一九〇四年まで政府の教育・宗教・産業局長官を務めた。一九〇〇年にジュバラを訪問し、カルティニと会談した。その後、カルティニの文通相手となった。

③ Seroto [1977] に若干の言及箇所がある。

Ⅱ カルティニの著作とその掲載誌

(1) 著作内容と掲載誌の性格

カルティニは生前に、どのような見解を発表していたのであろうか。また、それはどのような性格をもった出版物に掲載されたのであろうか。本稿では、カルティニの生きた姿を浮かび上げさせるという観点から、彼女の存命中に出版された著作に絞って論じたい。

カルティニの著作を *Door Duisternis tot Licht* 一九七六年版の四三八頁より抜粋した「カルティニの著作リスト」の中には死後出版されたものも含まれる。このほかにも、カルティニが一九〇三年に政庁へ提出した覚え書「ジャワ人に教育を」があるが、すでに紹介したことがあるので、ここでは割愛する。先述のように、従来のカルティニ研究では、手紙の文面の省略や、編者の意図が指摘されているにもかかわらず、常に①の書簡集が引用された。しかし、②から⑦までに關しては、雑誌名や本の題名に言及されても、その内容が紹介されることはなかった。①については、すでに多くの作品に記されていること、また死後七年経て編集出版されたことを考慮し、ここでは②より順を追って説明

資料 カルティニの著作リスト

BIBLIOGRAFIE R.A. KARTINI

- ① Raden Adjeng Kartini: *Door Duisternis tot Licht*, Gedachten over en voor het Javaansche volk van wijlen—, bijeengegaard en uitgegeven door Mr. J.H. Abendanon, 's-Gravenhage, 1e druk 1911, 2e druk 1912, 4e druk 1923;
- ② ——— *Het huwelijk bij de Kodja's*. in: "Bijdragen tot de Taal-, Land-en Volkenkunde" 1899;
- ③ ——— *Een Gouverneur Generaalsdag*. in "de Echo" 1990;
- ④ ——— *Een oorlogsschip op de ree*. in "de Echo" 1900;
- ⑤ ——— *Ontgoucheling*. in "Weekblad voor Indië" 1904;
- ⑥ ——— *Van een vergeten uithoekje*. in "Eigen Haard," 1903;
- ⑦ ——— *Het blauwverven*. in *de Batikkunst in Nederlandsch-Indië en haar Geschiedenis*, door G. P. Rouffaer en H. J. Juynboll, 1914.

出典：Kartini, R. A., *Door Duisternis tot Licht*, bezorgd door J. H. Abendanon, Amsterdam, 1976. p. 438.

を加えたい。

②、「ロジャ社会の結婚」

その内容は、ジャワのムスリムの結婚式について、新婦に主眼を置いて記した論稿である。例えば、結婚式の衣装や食事の様式などを、式の前日から式後五日目までの一連の儀式を詳細に解説している。Bydragon は、王立地理言語民族学研究所 (KITLV) の主要刊行物であり、一八五三年の創刊以来、現在に至る。カルティニの論文が高水準の学術誌に採用されたことは特筆すべきことである。と同時に、東インド住民の論文が掲載されること自体が、当時としては注目に値することであった。この論稿は彼女の父親の名前で公表されたが、一八九九年十一月六日付のステラ宛の手紙の中で、この論文は自分が書いたと述べ、その抜刷をステラに送付したことが記されている。また、この論文の題目が、当時バタヴィアで、書店と出版業を営んでいたコルフ (G. Kolf) のブックカタログ (一九〇五年版) に掲載されていた。このことから、カルティニの論稿が先述の学術誌に掲載された後、同年に単行本としてハーグで出版されたことがわかる。

③および④は第三節で言及する。

⑤、「幻滅」

掌編小説である。その内容を簡約したい。

「一羽の小鳥が巢の外の広い世界にあこがれ、一日も早く巢立ちたいと強く主張したが、父親の許しを得られなかった。ある日、自ら巢を離れたが、現実の世界は父親の言った通り危険に満ちており、自分の思い描いた美しい世界とはかけ離れていたことに、幻滅を感じた。そして、小鳥は世間の荒波の中で疲弊し、ついに亡くなった。」

カルティニの死から約二週間後の一九〇四年十月二日、第二十三号に掲載された。

Weekblad voor Indië は、一九〇四年五月一日にスラバヤで発行され、一九一七年まで続いた週刊誌であった。寄稿家にはボレル (H. Borel)^②、ファン・コル (Van Kol)^③ 夫妻、サフォルニン・ロフマン (A. Savornin-Lohman)^④ などオランダ在住の著名人の名前がみられる。雑誌は毎号十六頁で構成され、その内容は総督関係の記事、ヨーロッパのニュース、女性の現状、ユーラシアンの実態、スポーツ、音楽、演劇、さらにハーグの東インド料理店の記事にいたるまで多様な分野の話題が満載されている。東インドの話題と並んでヨーロッパにも題材を多く求めていることに関して、主たる読者層である東インド在住のオランダ人のヨーロッパの動向を知りたいという要望に応じて、内容の構成がおこなわれていたといえよう。換言すれば、読者のひとりであったカルティ

ニにとつては、ヨーロッパの動向を日常レベルにおいて具体的に把握することができる雑誌であったといえよう。

さらに、カルティニとこの雑誌のかかわりで言えば、一九〇四年十月九日にカルティニの追悼記事が掲載され、翌年二月十二日には「ジュバラの思い出」という題で、カルティニを偲ぶ記事が掲載されている。これらについては第三章で述べる。

⑥、「忘れられた辺境から」

ジュバラの木彫工芸に関する記事である。そこには、カルティニと二人の妹の写真と一緒に木彫工芸品の写真が掲載されている。その一節を次に紹介したい。

「昔のポルトガルの砦のある山の後ろに、ブラカン・グヌン(Blakang-Gooneng)」と呼ばれる木彫工芸品たちの住む村がある。そこには、見事な木彫を創作する人々が昔ながらの道具を用いて仕事をしているが、その技術には賞賛に価するものがある。控え目に床に坐り、製作に励む褐色の肌の人々に尊敬の念を覚え、彼らが生来の芸術家であると感じ入るのである。

誰が彼らの能力を鍛えたのか―誰が田舎の素朴な人々に木彫や絵の指導をしたのか（中略）。

それは、昔より親から子へと習い伝えた技法である。ブラカン・グヌンでは、村人すべてが木彫師や家具職人である。ここでは、

老いも若きも皆が木彫技術を心得ており、技量に応じた仕事をしている。

ジュバラには、家具を製作する村がほかにもあるが、優秀な木彫技術をもった村はブラカン・グヌンただひとつである。なぜ他村でこのような木彫品を作らないのかとよく質問されるが、『ほかの者にはできない。ブラカン・グヌン生まれの者だけができるのです。』という答えがきまって返ってくる。では、なぜだめなのかと尋ねると、『ブラカン・グヌンにだけダニヤン(Danjang・土地の精霊)がおり、彼らの子孫にだけそのすばらしい才能を与えるのです。』という返事がかえってくる。」

別の箇所では、ジュバラの木彫品が世間で認められるには良き理解者や協力者が必要であるが、さいわいにもカルティニは東西協会の協力を得て、工芸品を販売していることが述べられている。また、一九〇二年六月に、パタヴィアで東西協会が主催した「東インド工芸展」が成功をおさめたこと、そこにジュバラの木彫品も出品され高く評価されたことも記されている。そして、その工芸をはじめとする植民地における文化のすばらしさを、本国の人々に広く知ってもらいたいと述べている。

すなわち、この記事を通してカルティニが木彫工芸の秀れた芸術性をオランダ人に紹介し、彼女自ら工芸師の育成と保護に努め

たことがわかるであろう。

雑誌の中では、彼女の寄稿に先立ってカルティニの紹介記事がある。そこには、この記事がアベンダノン (R. M. Abendanon) 夫人を介して雑誌社に渡ったことが記されている。一方、カルティニは著作が掲載されたことについて一九〇三年二月十七日付のアベンダノン (J. H. Abendanon) 宛の手紙の中で、「生まれて初めて実名で公表した作品である。しかし、人が私達を宣伝として使ったことをこころよく思わない」(Kartini 1987: 273)。」と記されている。カルティニは一体何の宣伝に使われたのか—オランダ語教育を受けたジャワ人女性の好例としてであろうか。あるいは、彼女は記事の中で「東西協会」に言及しているところから、協会の宣伝に使われたのであろうか。この点については今後の課題としたい。

さて、Eigen Haard はアムステルダムで出版されていた週刊誌であった。毎週およそ六つの記事が数枚以上の写真付きで掲載され、全体が十六頁で構成されている。記事は、政治・経済・文化・植民地事情などあらゆる分野におよび、しかも時勢に合ったトピックスが取り上げられた。その視点は中道であり、現在では Eigen Haard を当時のオランダ社会を知るための重要な資料として、用いられている。

カルティニに関しては、先述の彼女の記事のほかに、一九〇四年十一月十二日に追悼記事が掲載されている。これについては第三章で述べる。

⑦、「藍染め」

ローファール (G. P. Rouffaer)、メインボル (H. J. Jynbol) 博士による『オランダ領東インドにおけるバティックとその歴史』の中の「藍染め」の章に、カルティニの著述が引用された(同書 三一七—三一九頁)。序章の一節を次に引用したい。

「この説明書は、若いオランダ人官吏がバティックの本を出版しようとしたものに、カルティニが自作のバティックを補足し、それに詳しい説明をつけたものである。そして、これを一八九八年の展覧会に送ったのである。」すなわち、この本の出版年は一四四年であるが、カルティニの「藍染め」の説明書は、一八九八年にハーグで開催された「全国婦人技芸展覧会 (De Nationale Tentoonstelling van Vrouwenarbeid)」のために作成されたものである。事実、一八九九年十一月六日付のステラ宛の手紙の中で、「展覧会のためにバティックの説明書を作った。それがバティックの標準本にとりあげられることになった」(Kartini 1911: 26)。」と述べられている。この本の第一版は一九〇〇年にH・クレイマン社から、第二版は一九一四年にA・オーストフック社から出版

かれた [Seeroto 1984: 102]。

カルティニの説明書は本文中で、「ジュベラ・マニユスクリプト」といわれている。そこには、「バティックの仕事は女性の手作業に全てを負うている」と述べられている。このことは、カルティニがバティックの藍染めの技法だけでなく、その作り手である無名の女性達の存在を、しっかりと視野に入れて書いていることを表しているといえよう。この点に、彼女がジャワ人女性の仕事ぶりにこころを注いでいた一端がうかがえよう。また、編者が序章で、「バティックの説明書がカルティニによって、見事なオランダ語で記されている。」と書いている。

この本は、左頁にオランダ語、右頁にドイツ語で書かれており、現在でもバティックに関する高度な専門書として、高い評価をうけている。

さて、今まで見てきた②から⑦までの著作のうち、オランダで出版されたものは②・⑥・⑦、一方ジャワで出版されたものは③・④・⑤である。両者を比較すると、オランダ在住の読者を対象に書かれた作品は、主としてジャワの美術・工芸に関する内容である。換言すれば、西洋人むけのジャワの文化紹介のような趣きがある。しかし、ここで重要なことは、カルティニが誇りをもって自身の文化を紹介している様子が行間に表われていることであ

る。このことは、先述のように、カルティニが十九世紀末のヨーロッパにおける女性解放の思想に影響を受けたことで、彼女が女性として且つジャワ人としての自尊の念をもつことができるようになった成果であるといえよう。

一方、③と④はジャワの文化・社会をある程度知っているオランダ人を対象に、当時のジャワ社会の状況が描かれている。その内容と掲載誌について、次節で述べよう。

(2) De Echo

本節で、『デ・エホー (De Echo 訃)』だけを扱うのは、カルティニが予約購読者且つ連載記事の執筆者として、深くかかわりをもったからである。前者については、書簡集の中に『デ・エホー』の掲載記事の見出しがしばしば見られる。したがって、彼女が言及した記事を補足しながら書簡集を読めば、彼女の主張をより明確に理解できると考えられる。それゆえ、この雑誌の傾向をここで把握したく思ったからである。また、後者については、彼女は一九〇〇年四月五日から六月十日まで(資料④)、および同年九月二日から十一月十八日まで(資料③)の二度にわたって連載記事を受けもっていた。このことは、この雑誌が三年にわたって発行されていたことを考えると、彼女はその六分の一の期間を

執筆者としてかかわったことになる。すなわち、カルティニは読者として影響を受ける一方で、寄稿することで読者に影響をあたえたといえるであろう。

では、『デ・エホー』とは一体どのような雑誌であったのか。

十九世紀末のヨーロッパでは、女性を対象とした雑誌が少なからず出版されていた。その背景には、当時のヨーロッパ社会における子供や労働者や女性の地位や権利の問題が議論されはじめてきたことがあった。例えば、カルティニがオランダから取りよせて定期購読をしていた *De Hollandsche Lette* (『オランダの百合』) もそのひとつであり、同権・自立・解放をめざす社会運動の一部として、女性の地位の問題を追求することを基調とした週刊誌であった〔富永 1991: 46—47〕。この動きに影響を受けて、ジャワでも女性を対象とした雑誌が出版されはじめた。それが『デ・エホー』であり、一八九九年から一九〇二年までジョクジャカルタで出版された。編集長のテル・ホルスト (Ter Horst) 夫人による「創刊にあたって」という記事を、次に要約して紹介しよう。

「社会における我々女性の地位を、我々が望む地位にまで高めるために、あらゆる分野における知識や教養を身につけて日々立ちまわっていく時が、すでに東インドにも到来した。すなわち、我々の社会的地位が如何様であるかと問われる時が、ここ東イン

ドにすでに到来したのである〔*De Lette*。一八九九年十月十一日〕。ここに、『デ・エホー』が女性の新しい生き方を追求する雑誌であることを理解できよう。

さて、どのような人々がその読者となったのであろう。一九〇一年八月四日から九月二十二日までの『デ・エホー』には、およそ三〇〇人の定期購読者の名前が公表されている。その中にはローゼボーム (Roosboom) 総督夫人、ダウニス・デッケル (Douwes Dekker) 夫人、作家ダウン (P. A. Daan) の長姉、パタヴィアで女学校を経営していたアリング (C. Alling) 夫人、オランダ在任の有名な作家テレーズ・ホーフェン (Therese Hoven)、女流作家でカルティニの文通相手のオーフィンク・スール (Ovink-Soer)、同じく女流作家のスフテレン (M. van Suchtelen) などの名前が挙げられている。勿論、その中にはカルティニの名前も見受けられる。大半が東インド在任のオランダ的な女性の名前である。それ以外には、オランダ在任者のほかに、若干名であるがドイツや東京在任の読者もいる。また、パタヴィアの新聞 *Nieuws v. d. Dag* の編集部や読書サークルの代表者名が挙げられていることから、多数の人々がこの雑誌を輪読していたと思われる。次に、読者層を把握するために広告をみてみよう。そこには、ブーニング (Bunning) 出版社、デ・インディッ

シュ・クラント (De Indische Courant 新聞)、スラバヤの女子寄宿学校、パリのブランタン百貨店の衣料部門のカタログ販売などの広告が、しばしば掲載されている。このことは、東インド在住の裕福なオランダ人女性を、主たる読者としていたことを示している。

次に、記事の内容と構成をみていこう。雑誌全体が十六頁あり、論説・連載事記・連載小説・文通欄・投書箱などで構成されている。特に、女性解放をテーマとした記事が多い。例えば、女性解放運動の指導者達、東インドにおける女性のための仕事―薬剤師・看護婦など、女性と結婚、バタヴィアの女子HBS、オランダ文学の中の女性達、女性の経済状態、ヨーロッパの女性の暮し、結婚に関する法律、自由結婚についてなど女性の新しい生き方を追求する内容の記事が毎回掲載されていた。

その構成内容は、先述の『オランダの百合』と非常に酷似している。例えば、ウィーク・カレンダー、文通欄、投書箱、読書案内の形態は、『オランダの百合』を手本にしたかのようである。一方、異なる点は『デ・エホー』では連載小説や肩のこらない掌編小説、料理欄(フランス料理やパンの作り方、フルコースのメニューの作り方が初心者むけに解説されている)が毎回掲載されている。また、東インド各地の文化や生活を紹介する企画もある。

ほかに、日本からのレポートも連載された。これらの点が、全体が女性解放思想で貫かれていた『オランダの百合』との相異点である。『デ・エホー』の場合は、東インド在住のオランダ人女性を読者対象としているため、その絶対数が限られている。したがって、女性解放思想にもあまり関心のない女性にも楽しめるよう、企画・編集されていたといえよう。

さて、カルティニはどのような記事を書いていたのだろうか。まず③では、カルティニが総督の歓迎会に列席した時のことが記されている。④では、ジュバラに軍艦が入港し町中がさわぎになった様子や、カルティニ達が艦内を視察したことやオランダ人水兵達との交流を描写している。このことは、カルティニがジャワの慣習を破った行動をとったことを、自ら公言したことを意味する。本稿では、③の「総督の日」に絞って次に述べたい。

ローゼボーム総督夫妻のスマラン訪問が決定し、その歓迎会にカルティニの父親(当時ジュバラのレヘント・Regent 知事)も列席することになった。父親は歓迎会にカルティニも出席することを許したため、カルティニとその妹達と父親がそろってスマランへ行くことになった。カルティニは記事の中で、スマランへの道中のこころはずむ様子や、総督夫妻との出合いについて言及している。また、総督を迎えるスマランの街は旗や花であふれ、非常

に華やいだ趣きであったことを詳細に描写し、カルティニ達はその雰囲気に呑まれて非常に昂奮したと記している。次に、このことを具体的に示している文章を挙げよう。

「父は娘達が喜々としているのを見て、満足そうに微笑をうかべていた。お父様ありがとうございます。父に対する感謝の念がこみ上げてきた。親愛なる父はどんなに私達を愛していることか(中略)。父は昔から続いてきた因習を破ってまでして、私達を外の世界へ連れ出してくれた。私達を幸福にしてくれた。私達は外出やパーティーに出席することが嬉しいのではなく、自由に歩きまわれることに嬉しさを感じる。高く厚い塀の中とは全く異なる空気が吸える、自由な状況を嬉しく思う―そして、それは父が私達に与えてくれたものである。もしご先祖様がこれを知れば、お墓の中で驚嘆するであろうが、度量の狭い人々もまた大層驚くことであろう。……私達は、ジャワ全体を照らす新しい時代の夜明けに、今立ってゐる〔De Echo 一九〇〇年十月二十一日〕」。

ここで注目すべきことは、カルティニが父親の許しを得て閉居の慣習を破ったことを、一九〇〇年の時点で活字を使って公言したことである。しかも、それを批判する旧態依然とした人々に対して「度量の狭い人々」と表現していることである。さらに、彼女は新しい時代―閉居の慣習が消滅する時代―が到来することを

予感し、自身がその夜明けに相当する時期に位置すると述べ、自己を正当化していることが示されている。このことは、カルティニがジャワ社会の実状―ジャワの因習に束縛された状況を認識した上で、未来を指向するビジョンを確立したことを示している。

なお、カルティニは Tjga Soeetara (三姉妹) というペンネームを用いて執筆したが、それが誰であるのかすぐに人の知れるところとなった〔Kartini 1911: 119-120〕ことを手紙に書いている。その結果、彼女のものには原稿の依頼件数が増加した。実際には、彼女が寄稿することに対して、父親の同意が得られないことが再三あったと書簡集の中に幾度か記している。しかし、このことは、当時カルティニが文筆家であると認められていたことを示すといえよう。

- ① K I T L V 所蔵のコルフのブックカタログの四頁に掲載されていた。
- ② オランダ人作家(1869-1933)。その作品はカルティニの愛読書であった。
- ③ カルティニの文通相手。氏はオランダの社会民主労働党(S D A P)の国会議員であり、夫人は作家であった。
- ④ 女性解放運動家、文筆家(1868-1930)。カルティニはその著作に影響を受けた。
- ⑤ この中にはオランダ人女性だけでなく、ユーラシアン女性も含まれると思われる。

⑥ 当時のジャワで、未婚女性の名前が公けの場にのぼることは、その女性に「傷がつく」と「[Kartini 1911: 239]とされたためである。

Ⅲ カルティニの追悼記事

これまで、カルティニが生前に公表した著作を紹介し、彼女の見解や活動をみてきた。では、カルティニは生前に、人々にどのように受けとめられていたのだろうか。本章では、カルティニの死亡直後の追悼記事を紹介し、この点を考える。そこから、彼女の生きた姿が考察できると考えるからである。

カルティニの死亡については *Indische Gids* に記載され、それによれば当時の新聞・雑誌が、彼女の死亡を報道したことがわかる。本章では、東インド側から *Weekblad voor Indië* を、オランダ側から *Eigen Haard* をとり上げる。それらは、生前のカルティニを知る上で貴重な資料といえるからである。

(A) *Weekblad voor Indië*

カルティニは、一九〇四年九月十七日に死亡したが、その約三週間後の十月九日に追悼記事が写真付で掲載された。それは主として、①カルティニと西欧文明とのかわり、②彼女の使命、③結婚と晩年の生活について言及している。まず、①については

「カルティニが西欧文明に近づくことによって、ジャワ人と疎遠になることが懸念された。しかし、彼女はその過程において自らこころを磨き、こころの成長によって、逆に民衆に共感を覚えるようになった。」と記されている。⑥について、その使命はジャワ人女性の地位向上であった。具体的には、カルティニが開設した女子校がジャワやオランダ人の間で評判になったことや、ジュバラの木彫品をはじめとする特産品を広めたことが、ジャワ人に大きな利益をもたらしたことについて記されている。⑦について、結婚することが彼女の本意であったかどうかと疑問を投げかけている。そして、西欧教育を受けたカルティニも、結局はジャワの慣習を拒否できなかったと述べている。結婚後の生活については、家庭環境が悪く決して幸福ではなかった。そのような状況の中でも、カルティニは産業の振興につとめ、オランダの共同組合の方をとり入れようとしていたことが記されている。

また、一九〇五年二月十二日号には「ジュバラの思い出」という記事があり、その一部にカルティニを偲ぶ箇所がある。ここに抜粋し、紹介したい。

「カルティニとの長い会話の中で、彼女がこよなく愛するジュバラの人々と土地について話してくれた。彼女がその人々たちのためにやろうとしていること——ジュバラの民芸品の振

興、とりわけ木彫工芸に心血をそそいでいると語っていた。

彼女の教養、ピアノ演奏、絵画、著作には、ネリー・ファン・コル夫人をはじめとするオランダの知識人との交流の影響によるところが大きいと語っていた。ジュバラにジャワ人の女子校を開設するという賞賛すべき試みは、女性の地位向上とジャワ人の高揚という目的がある。

彼女が教養ある貴族の女性であることは、外見だけでなくこころ映えから明白に察せられる。彼女はジャワ人をここから愛しており、彼女の希望はジャワ人の高揚のために共に働くことである。それは、彼女の心情の発露である。彼女は西歐文明の良いものを、ジャワ人に与えたいと願っている。

彼女はいつも、いろいろな事を話してくれた。例えば、ジャワ人について、その高揚する方法について、ジュバラのまじの歴史や遺跡、それからヒンドゥー時代のジャワ文化の水準の高さなど、ジャワの過ぎし黄金時代について語ってくれた。

私達は長時間にわたり、彼女のころのうちにある事を全て残らず語り合った。そのうちに、私達の周囲に人が集まってきたため、当たり障りのない会話に移した。そこにシャペンが運ばれ、杯を交しながらの軽い会話となった。

別れぎわに、私は彼女に扇子に名前を書いてほしいと言った。その日本製の扇子は、本来は涼をとるために扇ぐものであり、電気のない所でも使用でき、船内で使われていた。私はこの扇子を若い船員からもらった。カルティニは、それに大きくしっかりとした字で *Kartini* と書いてくれた。」

(B) *Eigen Haard*

この雑誌は、前章で述べた通りアムステルダムで発行されていた。追悼記事にはカルティニの写真を付けて、一九〇四年十一月十二日に掲載された。しかも、その執筆者がカルティニの文通相手であったゼーハンデラール (E. H. Zeehandelaar 通称ステラ) ということもあり、ここに全文を紹介したい。

「多くの読者は、本誌一九〇三年一月三日号に掲載された、ジュバラの木彫に関する記事をまだ記憶にとどめているであろう。その記事を書いた人物は、当時 R・A・カルティニと呼ばれていた。

手紙で彼女の早すぎた死を知らされて以来数週間悲嘆にくれているが、この若き女性について、残してくれた思い出に感謝を捧げつつ、述べたく思う。

私が彼女から初めて手紙を受け取ったのは、一八九九年六

月のことであつた。^②これが長きにわたる文通の始まりで、自分の年令について書いたことなどを鮮明に覚えてゐる。私はこの文通によつて、人間として確かな考えをもつた気高い人物、しかも滅多に出会えない人物を知り、学べたことを光榮に思う。

三姉妹の写真をここにもう一度掲載したが、この三ツ葉の長姉が最も洗練された有能な人物であつた。彼女は十二歳までしか学校教育を受けなかつたにも拘らず、立派な文筆家もうらやむ程オランダ語にたけていた。彼女の手紙はいつも見事な文章スタイルであり、豊富な語彙で外国人が書いたとは思えないほど立派で、賞賛に価するものであつた。生來の恵まれた資質と語学の才能で、彼女はオランダ語を多読することだけで第二の母語にしてしまつたのである。つまり、彼女はオランダ語を完全にマスターしていた。もっともこの点について、彼女は首を縦に振ろうとしなかつたけれど。

彼女の理想は、長年にわたつて甘んじてきた低い地位から、ジャワ人女性を引き上げることであつた。それを通じて、彼女は間接的にジャワ民族全体のためになる仕事をしようとした。彼女は、子育てをする女性から大きな力がもたらされることを認識していた。

民族の自立について、民衆は尊敬する貴族から多くの事を見習ふことから、彼女は手始めに貴族の娘達の教育にとりくんだ。彼女は妹達と一緒に学校設立を計画し、知識を与えるだけでなくこころの面も育てる教育を考えた。高位のジャワ人女性には、それが不可決と思つていたのである。また、彼女の教育案には保健や病人看護も重視されていた。

三ツ葉の最年少の妹が結婚した後は、彼女はもうひとりの妹ルクミニ (R. A. Rokmini) とその理想にむけて推進した。彼女の希望は、この計画に必要な知識をオランダで修得することであり、昨年はそのチャンスが到来した。男子なら大きな好機に遭遇したと思うであろうし、彼女自身の境遇においてもそう思われた。レヘントの子息がオラダへ留学する。男子なら一度は抱く希望であり許されることであるが、女子ではどうであつたか。

この勇敢な二人の先駆者が、その理想のために苦惱していることを誰も理解しようとしなかつた。二人がオランダ留学を考えていた時、いかなる困難も克服できると思つていたその矢先に、留学をとりやめた。その理由はここでは言及できないが、彼女にとってそれがいかに大きな犠牲をともなつたか、誰もわからないであらう。彼女は自らすすんでそうした。

なぜなら、彼女はそうすることが彼女の理想に捧げることく、自身のすべき事だと思つたからである。『私達は自分自身に属しているのではなく、仕事に属している』と、彼女は留學をとりやめジャワにとどまるという苦しい決断をした後で、書いていた。

彼女がその理想のためにどれほど苦悩し、精神的な傷手を負つたかについて、私はここに書くことはできない。書けば一冊の本ほどのボリュームになるであろうから。

『先駆者には何ひとつ楽しいことはなく、地獄の苦しみがあるとわかっていました。しかし、地獄を支援する人がいるとは思つてもみませんでした。でも、数えきれないほどの苦しみをあじわいましたので、もう何も感じなくなりました。いつの時にも理想を正当化するのには難しいことでした。一般の多数の人々とは異なつた印をつけて、人中を歩き回ることに対して、世間はがまんならないのです。世間からずっと苦しめられた結果、自分の服を脱ぎ捨て、その代わりにごく普通の服を着るようになるのです。』

彼女自身のことばを引用する方が、気高き彼女がこころ狭き者達の中で、いかに苦悩したかがよくわかると思い、先の文章を挙げた。しかし、彼女は諦めの境地でそれを耐えた。

彼女はその希望が萎んでいくにも拘らず、全能の神を信じていた。このムスリムの女性は本当に純真であつたから。

運命は彼女に別の決定を下した。つまり、彼女の苦勞は実らなかつた。

昨年十一月に彼女はレンバン (Rembang) のレヘントと結婚し、そして長男の出産によって命を落とした。

彼女を愛した者に、彼女は忘れられはしない。短い生涯の中で彼女が成しえたことは消滅するのではなく、彼女が心血を注いだ民族によつて達成されるよう、希望する。」

右の文章には、カルティニがオランダ語を修得し西欧文明を受容した結果、どのように生きたかについて手際よく要約されている。理想と現実の間で苦悩したカルティニの姿を浮かび上がらせている。しかし、カルティニが留學をやめた理由が記されていない点は非常に残念である。

さて、これらの記事をもとに、カルティニが生前より社会で広く知られていた点、「倫理政策」とカルティニのオランダ語の関係および彼女のオランダ語表現について述べる。その前に、これらの記事の内容が一致する点を記す。

その共通点は、カルティニの人格、使命、結婚についての三点

である。まず、その人格については、彼女が知的水準だけでなく「精神的にも高度な人物であると記されている。使命については、ジャワ人女性の地位向上とジャワ人全体の高揚に献身することであつた。それを達成するために、彼女はまず女子校を開設し、ジャワ貴族の娘の教育に着手した。それは、彼女が生まれ育つた土地と人々を愛していた表れであつた。結婚については、ネガティブな見解が記されていた。

次に、追悼記事それ自体について言及しておこう。両方の雑誌において、有名人が死亡した時に記事が編まれた。例えば、(A)の雑誌では著名なレヘントであつたカルティニの父親が死亡した時には、約三週間後に追悼記事が掲載された。(B)の雑誌では、主としてオランダの著名人が死亡した時に、それが編まれた。カルティニの追悼記事の形態は、両方の雑誌における著名人のそれと全く同じである。このことから、カルティニはオランダとジャワの双方で「有名人」として扱われたといえよう。

しかし、一般にカルティニがオランダとジャワで知られるようになったのは、書簡集の出版（一九一一年）以降であつたと言われている。確かに、書簡集が版を重ね諸外国語に翻訳されたことや、ジャワにカルティニ学校が次々と開校された結果、彼女の名前は広く流布したことであろう。しかし、死の直後にオランダと

ジャワでほぼ同時に、社会的な著名人と並んで追悼記事が編まれたことは、カルティニの名前が生前よりかなり知られていたことを示しているといえよう。具体的には、木彫工芸の振興と東西協会との関係や女子校の設立、雑誌への寄稿を通じて、カルティニの知名度が高まっていったのであろう。しかし、それとともに彼女とジャワの伝統的社会との軋轢が深まっていったと考えられよう。先述の追悼記事を読めば、彼女がこのような状況の中でひとり苦悩した姿が浮んでこよう。それこそが、カルティニの実像といえるのではないだろうか。

第一章で記したように、従来のカルティニ研究では、二十世紀初頭における「倫理政策」やインドネシア民族主義運動との関連において、カルティニの考察がおこなわれてきた。しかし、追悼記事をみる限り、カルティニがオランダ語に堪能であることは努力と才能によると記されており、「倫理政策」によるオランダ語教育の成果であるとは記されていない。また、インドネシア民族主義運動との関係は、追悼記事には全く言及されていない。

最後に、カルティニのオランダ語の文章表現について述べる。カルティニの文章は、決まり文句（クリシエ）が羅列されているように見える〔土屋・1986：215, 1991：105〕といわれてきた。それは、カルティニが何をもとにして文章を書いたか、という点

とかかわってくるだろう。カルティニのオランダ語の修得について、オランダ語の多読という方法でそれを完全に修得したことが、(B)の追悼記事の中で明らかにされた。このことから、彼女が文章を書く時、その手本としたのが彼女の読んだオランダ語の文章であったといえよう。したがって、カルティニは当時のオランダ語の常套句をしばしば用いて、文章を記していたと考えることができよう。

① カルティニより五歳年長のアムステルダム在住の公務員、女権拡張論に関心をもち、『オランダの百合』を通じてカルティニと文通を始めた。カルティニはステラを厚く信頼し、互いに理解し合っていたことが、書簡の随所に見受けられる。

② カルティニはステラ宛の第一信を、一八九九年五月二十五日付で記している [Kerini 1911:]。すなわち、ジャワ発の手紙が約一ヶ月後には、アムステルダムのステラの所に届いている。このことは、一九世紀末の海運・造船の発達を如実に示す一例であるといえる。

IV むすびにかえて

以上、カルティニの生前に公表された著作と追悼記事を紹介し、カルティニの実像を考察する手がかりを求めてきた。それは次のようにまとめることができるであろう。

カルティニは、ジャワのレヘントの家庭に育ちオランダ語に堪能であったが、それは彼女の努力と才能によるところが大きかった。

た。彼女はオランダ語を通じて西欧文明を受容した。はじめ、彼女が西欧文明に近づくけばジャワ文化と疎遠になると懸念されたが、彼女はその過程で精神面を磨き、ジャワの民衆に共感を覚えるようになった。そして、彼女は自身の使命をはたそうとした。

彼女の使命とは、ジャワ人女性の地位を向上させることであった。そのため、彼女は女子校を開設した。また、彼女は木彫工芸の振興にとりくみ、東西協会の協力を得て木彫品の販売ルートを開拓した。木彫品は東インド内外の展示会に出品され、その芸術性は高い評価を得た。彼女は木彫工芸のすばらしさについて誇りをもって、オランダの出版物を通じて紹介した。一方、彼女はジャワの慣習を自ら改めようとした。なぜなら、ジャワ人女性の地位が著しく低いことは、人々がその慣習を盲目的に遵守していると、彼女は考えたからである。実際に、彼女は自身が慣習を破打した一例を、オランダ語の雑誌を通じて公表した。

しかし、その言動は、旧態依然とした社会に受け入れられず、批判的的となった。彼女は理想と現実の間で苦悩した。そして、彼女は失意のうちに結婚したが環境に恵まれず、一年後に長男を出産して亡くなった。

その死の直後に、カルティニの追悼記事がオランダとジャワで掲載された。このことは、カルティニが生前より、双方の社会で

知られていたことを示している。また、そこにはカルティニと「倫理政策」との関係は、全く言及されていなかった。

また、追悼記事には、「ラデン・アヌ・ジョヨアディニングラツト (Raden Aju Djoadiningrat) を偲ぶ」と嫁ぎ先の姓名で、

掲載された。「ラデン・アヌ」とは貴族の既婚女性の称号である。

一方、カルティニの著作の中で、生前に実名で発表したものは、資料⑥だけである。その独身時代には「ジュバラのレヘントの娘 (dochter van de regent van Japara)」と紹介されていた。当時、未婚女性が一人の人間として固有名詞で存在することが、非常に難しい時代であったことを考えると、それはもっともなことであったのかもしれない。しかし、その後、彼女は人々のあいだで独身時代の名前で呼ばれはじめた。それが、いつからであるかは知らない。おそらく、書簡集が出版され、「カルティニ学校」が開校した後のことであろう。書簡集は、ジャワの因習と闘いながら女性の地位向上に献身したカルティニに焦点をあてて編集されている。そのため、書簡集を読んだ人々が、カルティニの純粋性に感動して、その清純なイメージをいっそう増幅し、「ラデン・アジュン・カルティニ」と呼ぶようになったのであろう。「ラデン・アジュン (Raden Adjan)」とは、ジャワ貴族の未婚女性の称号である。そして、このことはカルティニが理想化され「インド

ネシア国家独立英雄」となる過程と一致していると思われる。しかし、この過程でカルティニの実像―現実と理想の間で苦悩した姿を見えにくくしてしまったといえよう。

すなわち、彼女の理想とはその使命の実現であった。その根底には、十九世紀末の西欧の解放思想の受容を通じて、人種的、性的差別から解放された世界というビジョンがあった。一方、現実とは、彼女がオランダとジャワの伝統社会からジャワ人女性として束縛された状況であった。それは、ジャワ人女性の視点で捉えた十九世紀末のジャワ社会の実状であった。

カルティニの実像が解明されるために、その生前の史料がもっと紹介され、分析・考察されることが、カルティニ研究における課題であろう。

参考文献

- Kartini, R. A., 1911, *Door Duitennis tot Licht*, bezorgd door J. H. Abendanon, 's-Gravenhage.
- , 1987, *Brieven aan mevrouw R. M. Abendanon-Mandri en Haar Echgenoot*, bezorgd door F. G. P. Jaquet, Dordrecht.
- , 1979, *Surat-surat Kartini Remangan Tengah dan Utrik Bergasnya*, diterjemahkan oleh S. Sutrisno, Jakarta.
- , 1940, 『暗黒を越えて』牛江清名(訳)日新書院(原著 R. A. Kartini, 1938, *Hubis Glap Terbitlah Terang*, diterjemahkan oleh A. Pane, Jakarta.)

—、1987、「ジャワ人に教育を」富永泰代(記)『南方文化』第十四号。

Bouman, H., 1954, *Meer Licht over Kartini*, Amsterdam.

Kroeskamp, H., 1974, *Early School masters in a Developing Country: a History of Experiments in School Education in Nineteenth Century Indonesia*, Assen.

永積昭、一九八〇年、『インドネシア民族意識の形成』東京大学出版会。
Reksonegoro, K., 1958, *The Three Sisters*, trans. A. King, Salatiga.

シライスマンダリ・スロト、一九八二年、『民族意識の母カルティニ伝』

舟知恵・松田あゆみ(訳)井村文化事業社(原著 Soeroto, 1977, *Kartini: Sebuah Biografi*, Jakarta.)

土屋健治、一九八四年「カルティニの心象風景」『東南アジア研究』第二十

二巻一号。

—、一九八六年「カルティニ再論」日蘭学会(編)『オランダとインド

ネシア』山川出版社。

—、一九九一年『カルティニの風景』めぐみ。

Toer, P. A., 1962, *Punggil Abu Kartini Sadja*, Jakarta.

Tomlinaga, Y., 1987, *The Thoughts of Kartini: a Figure of Nineteenth Century Java (the final report submitted to LIPD)*, Salatiga.

—、一九九一年「カルティニの『世界認識』の形成過程」『南方文化』第十八号。

—、一九九二年「土屋健治著『カルティニの風景』『史学雑誌』第一〇一編第十号。

および、本文中の資料に挙げた文献。

講辞・本稿の作成にあたって京都大学の土屋健治先生に貴重なご示唆と

ご指導を賜わった。記して深謝を表した。

()